

鹿沼の自然・栃木の旅

月報第19号

(2013年12月)



北光クラブ
自然観察クラブ

綿貫数夫『学習と創作・私の綴方』
(大正15年10月15日・教育出版社刊)

一 立派な文とは

◆綴り方とは

何の学科に限らず、どうかしてよく出来るようになりたいと願うのは心の常であります。綴り方において、どうかよい綴り方が書けるようにと希うのは今もつ私たちの心であります。

さて、どうしたら立派な綴り方が書けるようになるのでありましょう。

それには、先ず「綴り方」とはどういうものであるのか、それがはっきり分っていることが大切であります。

一体、綴り方は、よく「綴り方を作る。」といいますが、色々なものを製造するように作るものではありません。「綴り方は作文である。」等ともいっていますが、文というものは作るものではないのです。作った文は形だけは整います。けれども、それには「生命」がありません。「たましい」がありません。文は作るものでなく、心の中にあることを綴るものであります。

私たちの心の中には、いろいろ世間で聞いたことや、見たことや、本や雑誌で読んだことや、それ等から感じたことなどが、沢山しまっておりま。けれども、それ等の事柄は只私たちの心の中にしまっておくだけでは、折角あった嬉しいことや、面白かったこと等も忘れてしま。思い出すとしても、その時と同じように思い出せるかどうか分らなくなってしまう。ばかりでなく、私たちの心に感じたことや信じたことを、人に伝えることが出来ません。言葉で伝えてもいいのですが、それでは後まで残すことも出来ません。そこで、文を綴ることが大切になって来るのであります。

尚、文を綴ることは、もっとも大事なことも考えられます。それは「文を綴ることは自分を伸ばすためである。」ということでありま。私たちが非常に嬉しかったことを綴るとしま。例えば、お父さんやお母さんと一所に上野公園にあそびに行って嬉しかったことを綴るとしま。そうした時、この嬉しいという感じは、ほんとうはその人でなければ味わえないものであって、その人々によって、嬉しい感じの深さが違うのです。いつもいつ

もお父さんやお母さんと散歩などしているものには、その嬉しさは極めて浅いが、1年に1度か2度位しかないものには、その嬉しさは極めて深いものとなるのであります。で若し、極めて深く嬉しさを感じそれを綴った時には、今迄お父さんやお母さんに、あんまりそういう所に連れて行って頂かなかったことを思い出して、しらずしらずのうちに「今の私」の幸福を感じて来たのであります。そして、幸福を感じたその時は、以前の私より一段と明るい輝きのある私になっているのです。又大層かわいそうな子供を見て深く感じたとします。この時には、私は、自然と心の中に、そのかわいそうな子供と、幸福な自分とをくらべているのです。ですから、此の心の感じを綴った時は、かわいそうな子供のうちに自分の幸福さを見出したので、この時自分は一段と進んだ自分になっているのであります。これはほんの一例にすぎませんが、感じたこと思ったことを綴ることによって、自分が伸びて行く場合は沢山あります。或いは綴る度毎に伸びているとも考えられるのであります。

こう考えてみますと、「綴り方」は作るものでなく、又色々なものを製造するのと違うことが明かになって来ます。

文は作るものではありません。綴り方は文の製造ではありません。綴り方は心の中にあることを綴るもので、いいかえれば、綴り方は生まれるものであります。文は生むものであります。



◆ねうちのある文

「綴り方」は生まれるものであるということは前にも述べましたが、立派な文とは一体どういうものか、それが分れば、一層、此の意味が明かになって来ます。

立派な文とはどんなものをいうのでありましょう。文のねうちはどこできめるのでありましょう。他の人の文を読んだり聞いたりして、「あぁいい文だ。ほんとによく出来ている。」と思うのはどんな文でありましょう。私たちは文のねうちをきめる標準として次の5つの事柄を考えたいと思います。

第一 見たこと、聞いたこと、感じたこと、思ったこと等を正直にかざりけなく綴った文即ち生活を真実に綴った文は立派な文であります。

第二 そのもの特別な性質がはっきり浮き出た文即ち個性のよくあらわれた文は立派な文であります。

(次ページへ続く)

第三 綴る事がらや心もちにぴったりあてはまる言葉で綴った文即ち想と言葉と一致した文は立派な文であります。

第四 綴った時愉快を感じるか、なぐさめられるか安心する文即ち満足を得る文は立派な文であります。

第五 読む人に深く感じさせる文即ち読者を感激させる文は立派な文であります。
(中略)



◆読者に感激させる文

少しむずかしい話になりますが、わが国が今日、世界の五大強国の仲間入りが出来るようになったのは、明治維新の出来上ったことが重大な原因になっています。その明治維新はどうして出来上ったか、それは、時代の力でもありましようが、その時代の力を作ったのは彼の徳川光圀の著わした「大日本史」*1や、頼山陽の書いた「日本外史」*2の文章があずかって力あるといわねばなりなすまい。即ち「大日本史」や「日本外史」の文章を読んで、朝廷に味方する志士が起り、終に維新の大業が出来上ったのであります。文章が如何に多くの人を感激させるかおどろく程であります。

また、支那の国に諸葛孔明という忠臣がありました。この人は劉備という天子によくつかえて、蜀という国をたてた人ですが、その劉備がなくなれると、その子をたすけて、蜀の国のためにつきました。ある年出征するにのぞんで、天子に文を奉りました。それは「出師の表」*3といって、一言葉一言葉に血のにじむような真心があふれている名文でありました。この文を読んで孔明の忠誠に感激しない者はありませんでした。そこで世の人は「出師の表を見て、泣かないものは人でない。」とまでいわれていますが、これによって、その文章がどんなに人を感激させたかわかりません。

こればかりでなく、人の文を読んで、学問の心を起し、又正しい心にかえった人は数えることの出来ない程ありましよう。

(中略)

立派な文は人を深く感じさせる力があります。人を感じさせることが強ければ強いほどそれは立派な文であります。

(東京府豊島師範学校訓導)

※ 文中の表記は読みやすさを考慮して勝手ながら適宜直しています。

※ 1 徳川光圀（とくがわみつくに）の著わした「大日本史」

江戸時代の歴史書。397巻。水戸藩2代藩主徳川光圀の命により、明暦3年(1657)水戸藩が江戸駒込の藩邸に史局を設けて編纂に着手、明治維新後も水戸徳川家で事業を継続して、明治39年(1906)に完成した。神武天皇から南北朝時代の終末すなわち後小松天皇の治世までを、中国の正史の体裁である紀伝体により4部397巻(別に目録5巻)計226冊で記述している。神功皇后を皇位から除き、大友皇子を弘文天皇とし、南朝を正統とした三点は三大特筆といわれ、その大義名分論史観は幕末の尊王思想に大きな影響を与えた。(世界大百科事典 第2版、デジタル大辞泉、百科事典マイベディア、大辞林 第三版による)

※ 2 頼山陽（らいさんよう）の書いた「日本外史」

頼山陽著の歴史書。源平両氏から徳川氏に至る武家の盛衰興亡の歴史を、司馬遷の『史記』世家の体裁にならない漢文体で流暢に叙述した歴史書。寛政12年(1800)広島藩脱藩後の幽閉中に執筆を始め、文政9年(1826)完成、翌年松平定信に献じた。22巻。天保7～8年(1836～37)ごろ刊。政権が武門に帰した由来を、史論をはさみつつ精彩な筆致で明らかにした人物中心の武家興亡史であるが、簡潔・平易な漢文、情熱あふれる名文で叙述された歴史文学ともいえる。史実は『大日本史』などの歴史書以外に、世上に流布した軍記物にもとづいて書かれているため誤りも多いが、儒教の名分論から展開された独自の尊王思想を特色とし、幕末～明治期に広く愛読され、幕末尊王思想に影響を与えた。(参考資料は前項と同じ)

※ 3 「出師の表（すいしのひょう）」

中国三国時代の建興5年(227年)、諸葛亮が主君の劉禪に奉った上奏文。自分を登用してくれた先帝劉備に対する恩義を述べ、あわせて若き皇帝である劉禪を我が子のように諭し、自らの報恩の決意を述べた文である。古来から名文中の名文とされており「諸葛孔明の出師の表を読み、涙を墮さざれば、その人、必ず不忠」(『箋解古文眞寶』の安子順の発言部分)と言われてきたほど、諸葛亮の蜀に対する忠義が如実に描写されていると言われてきた。漢代の古文の文体で書かれており、唐代・宋代の古文復興運動でも三国時代の文章としては唯一重んじられ、陳寿の三国志の本文にも引用されている他、『文選』『文章軌範』『古文眞寶』等の詞華集にも多く採用されている。(ウィキペディアより)



わたらせ渓谷鐵道・秋の小さな旅
～旧足尾線のあとを訪ねて～

今回も日の出前の集合です。車2台に分乗して出発、北へ向かうにつれ、霜に白く覆われた風景が展開します。清滝で日光在住の佐々木君一家と合流し、いろは坂の手前で道をそれて細尾峠の方へ進みます。

鹿沼からわたらせ渓谷鐵道に乗りに行くのには、起点の桐生からでなく、日光・細尾トンネルを抜けて足尾に入るのが便利です。鐵道が通る以前は、足尾から人も物も日光へ流れていた、その道をたどって行きます。両側に色とりどりの紅葉の山が迫り、トンネルを抜けると次第に谷が開けて、昔の名残りの人工構造物が右に左に点在する中を進み、一時は県都宇都宮に次ぐ県下第2の人口を擁していたという足尾の町に入ります。

まずは、町を見下ろすように聳える備前楯山(1272m)に登るため、そのまま町を抜けて登山口まで山道をドライブ、舟石峠に車を停めて、山頂まで1時間半ほどの小登山です。今は銅も掘り尽くされ静かな山です。すぐに展望が開け始め、北に聳える男体山との間には2週間前に登った社山から半月山の山なみが連なり、眼下には足尾の町、その地続きにグランドキャニオンと称される松木渓谷が、鉱害による傷跡を少しずつ回復しつつある様子を見せています。何処も紅葉たけなわの色彩に、展望を楽しみながらコーヒーとココアでのんびり朝のティータイムを過ごしました。



山を下りると、いよいよわたらせ渓谷鐵道へ。駐車の手前で、終点・間藤の隣の足尾駅構内に車を止め、次の列車を待ちながら昼食の店開きです。

足尾駅から予定の列車に乗り込み、なるほど「渓谷鐵道」の名に恥じぬ、渡良瀬川沿いの渓谷の紅葉の風景が町並み交じりに展開するのを車窓に楽しみながら、長い草木トンネルを抜けて群馬県に入りました。折り返し点の「花輪」は、駅近くに、北小を思わせる木造の小学校校舎が、廃校後記念館として公開されているのです。昔の学校の様子も再現しており、自由に弾いてよいオルガンやピアノがあったり、展示されている郷土資料の中には、昔の足尾線や周囲の風景をおさめた写真、昔の駅改札を再現した教室もあり、次の列車の時刻の手前でゆっくり見学できないのがとても残念でした。廊下では雑巾がけレースなども開催されるようです。花輪からの帰りは、車の運転手以

外は終点の間藤まで乗車。車掌さんが、出改札のみならず沿線案内、土産物の販売と甲斐甲斐しく働いていました。わたらせ渓谷鐵道の駅はどれも小さく無人駅も多いのですが、周辺を花や樹木で飾り、清掃が行き届きトイレも完備、廃線の危機を乗り越えた住民パワーで維持されているすばらしい鐵道です。

今回は見学しなかった「銅山観光」に、お土産だけ買いに寄りました。

足尾は現在、「町全体が博物館」として世界遺産にしよう運動しています。銅山跡ばかりでなく、間藤の先の鐵道廢線跡や、その奥に展開する様々の遺構、鉱害とその対策の現場など、産業遺産と環境の学習には題材が尽きない場所です。



備前楯山山頂にて
好天に恵まれて絶景を楽しめた

※ 参加者(敬称略)

小川知峻・裕月・恵美、佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、平井亜湖、小島美穂、石崎隆史・裕子、阿部瑞穂・良司・みゆき(計15名)

※ 見た樹木

コシアブラ、ヤシャブシ、アカマツ、ガマズミ、ミズメ、サラサドウダン、リョウブ、コナラ、ヤマツツジ、シラカバ、オオバアサガラ、カラマツ、ズミ、オノオレカンバ、ウリハダカエデ

※ 見た鳥、聞いた鳥

ヤマガラ、ウソ

《旅の記録》

鹿沼 6:30——土沢——(日光宇都宮道路)——清滝 7:30——(細尾トンネル)——足尾——舟石峠 8:00……9:30 備前楯山(1272m)10:00……舟石峠 11:30——足尾駅(昼食)12:58==13:34 花輪駅……旧花輪小学校記念館……花輪駅 14:21==15:13 間藤駅——15:30 銅山観光 16:00——(細尾トンネル)——清滝——(日光宇都宮道路)——土沢——17:30 鹿沼

※ 参加者からいただいたおたより



今年初めての霜柱を見ました。野生のサルも道路を走って行きました。山登りは大変だったけど楽しかったので良かったです。男体山で手を振っている人が見えました。景色もすごく良かったです。

(小川裕月・北小2年)

ぼくは備前楯山に登ってとても苦しかったです。途中にハンターがいてとてもうれしかったです。頂上から見た景色は最高でした。列車の旅は楽しかったです。その時から列車が好きになりました。備前楯山、また行きたいです。

(小川知峻・北小4年)

※ 足尾行の思い出写真集



今はさびれた小滝集落を抜けて備前楯山の登山口、舟石峠に着きました



“クマに注意”の看板に思わず緊張！



落葉して明るい登山道



一面の霜、落ち葉にも霜



山道の日陰には霜柱



尾根道の鞍部でひと休み



枯れ木にキノコの花盛り



備前楯山（標高 1272m）



落ちたどんぐりが早くも
「根」を出しています



備前楯山山頂からの展望、中央の黒い山が男体山、その左に2週間前に登った社山



ミズメ



オノオレカンバ



リョウブか
ナツツバキか



ウリハダカエデ



わたらせ渓谷鐵道・足尾駅



行き交う「わ鐵」



群馬県の花輪まで行きました



どこかで見たよな
なつかしい校舎



長い廊下

旧花輪小学校記念館前で→



自然観察クラブ・ホットニュース

☆ 鹿沼でシモツケコウホネ発見！？

某月某日、近年日光市小代で発見された新種シモツケコウホネを、鹿沼市内某所にて発見。詳しくは次号にて。お楽しみに！



シモツケコウホネ

☆ 上田町にタヌキの夫婦出現か？！

継続観察中。

催し案内①

山岳観望会および水鳥観察会

主催：自然観察クラブ

日時：1月2日（木）

曇天のときは3日（金）に延期

場所：黒川さつき橋東（河岸段丘の坂道上）

集合：鹿沼市役所駐車場AM8：00

（現地直行可）

内容：鹿沼市の背後にそびえる山々の

山岳同定、黒川の水鳥観察

持ち物：防寒具（ジャンパー、携帯カイロ等）、

カメラ、双眼鏡、図鑑等、

趣味に応じて持参

会費：無料（保険は加入しません）

申込み：あらかじめ阿部

（090-1884-3774）まで

ご連絡ください。

催し案内②

シダ観察会

主催：栃木県シダの会

日時：1月5日（日）

場所：鹿沼市深岩

内容：シダの観察を目的とした植物

観察会ですが、同定の難しいシダ類

に詳しい先生方が栃木県内から集ま

ります。種子植物に詳しい先生も多

く、レベルの高い植物観察会です。

申込み：参加希望の方は阿部

（090-1884-3774）まで

落ち葉の安蘇山塊ハイキング
～大鳥屋山と岳の山、唐沢山城跡を訪ねて～

三角点は一等から四等まであり、一等はさらに本点と補点に分けられるので5種類の区分になります。栃木県内には1等本点が7つ、一等補点が6つあります。鹿沼には羽賀場山に一等補点がありますが、今回は同じく一等補点のある佐野市（旧葛生、田沼町境）の大鳥屋山（693m）と岳の山に登りましょう。下山後、この度国の文化審議会により史跡に指定するよう文科相に答申された大規模な山城跡である「唐沢山城跡（からさわやまじょうあと）」を見学しましょう。

「唐沢山城は15世紀後半には存在したとされ、1602年に廃城になった。面積は、山城の史跡では関東最大の194ヘクタール。山頂の本丸南側に現存する、関東では数少ない高さ8mもの高石垣で知られる。ふもとには城主らの屋敷跡群が良好な状態で残るなど、遺構が広域に存在することも確認され、中世の城館の変遷を知る上で重要な城跡と評価された。」（下野新聞 2013年11月16日号）

日 時：12月8日（日）AM6:00 北小西門集合（解散はPM4:00頃）

行 程：鹿沼——（国道293）——葛生——（秋山川）——宮原バス停——

町営駐車場(W)……五丈の滝……岳ノ山……大鳥屋山……

町営駐車場——葛生駅（東武佐野線終点見学）——唐沢山城跡（散策）

——鹿沼

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒(ポット)、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、

ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、ヘッドランプ、

参考書（栃木県の歴史散歩、栃木百名山ガイドブック等）、

1/25,000地形図は「仙波」

会 費：おとな500円、子ども250円

今年度初参加の方は保険料800円(3月まで)。

申し込み：12月6日（金）までに、チャレンジスクール申込書で北光クラブ、
または阿部まで。

問合せ：電話 090-1884-3774（阿部）

会長寄稿

読み・書き・歩く

～自然観察クラブのモットー～



子どもたちの総合学習を担う北光クラブの中で、自然観察クラブは少しでも子どもたちにありのままの自然に親しんでもらう、という目的のもとに始まった。そのことは今でも変わらないが、代表者の好奇心ゆえ、今や自然観察クラブは究極の総合学習を目指している。そして僕はひそかに、このクラブのモットーとして「読み・書き・歩く」を掲げている。この3つの中で最も大切なことは、「歩く」である。これはもちろん「出かける」でもあるし、「登る」でもある。自然観察するにはとにかく、山にでも野原にでも出かけねばならない。ところがいざ出かけてみたまえ。山にも野原にも川にも知らない植物や昆虫ばかりだ。その上、山の麓には由来の知れぬ神社があり、山頂の近くには謎の石垣があったりする。そこでおのずと、植物図鑑や昆虫図鑑を繰り、歴史書を読まねばならぬことになる。そうして出かけた神社が何々大師由来の神社であるとか、石垣は何世紀の山城跡だとか、新たな事実を知ることにもなり、時には世にも知られていない新たな発見があるかも知れないのである。

私たちはそれを記録しておかない手はない。とりあえず記録しておけば、のちに自分の、あるいはそれを読んだ人に、多かれ少なかれ役に立つことになるかも知れないのだから。

この「読み・書き・歩く」のうち、一番簡単なものも、歩くこと、出かけることであろう。自分一人で出かけるのが無理なら、誰かが計画してくれた催しに参加してついでに行けばよいのだから。ところが、世の中にはこの「出かける」に重荷を感じる人がいかに多いことか。しかし同じような計画は二度とめぐってこないかもしれない。参加で

（次ページへ続く）

きる時に参加しておかないと悔いが残ることしきりである。かく言う僕だって、前日にきちんと山に行く準備をととのえておきながら、朝の寒さに怖じ気づいて山行きをやめ、一日ぼーっと過ごした時もあった。出かけることは、時には勇気の要ることかもしれない。

さて出かけたとしても、山や野原には知らない植物ばかりだ。それをいちいち調べるのは大変だ。最初は知っている人に聞けばよいのだ。一つの山に行って一つの植物の名前を覚えたら大きな収穫である。次、また別の山に行って、「この植物、この間もあつたけど何だっけ？」と思ったらまた聞けばよい。「ああ、ミズナラだった」と思い出したら、今度は自分のものだ。10も20も覚えてくると、今度は自分で図鑑を1頁1頁めくってでも、名前を調べたくなる。

今は様々な図鑑が書店にあるから、便利そうな図鑑を求めればよい。最初はカラー写真の図鑑が分かりやすいが、細かい所の特徴を知るには、絵のほうが大切な所が描いてあって分かりやすい。とても近い種類の細かい違いを調べるには、文章による解説が詳しい図鑑や、検索表が有利である。



今は郷土の神社や史跡の、あるいはそれに関する歴史のガイドブックもあるし、山歩きのガイドブックもあるから、疑問を持ったことはたいてい、本で調べることができる。

歩くこと、出掛けることに「読むこと」が加わると知識は無限に広がって行くのである。しかし、読むことは最も難しいことである。何度繰り返して読んでも理解できない、ということは珍しくない。植物図鑑など用語さえ分かれば文の意味など分かりそうなものだが、実際には理解できないことも多い。しかし、専門家に、実物を見ながら教えてもらったら必ず理解できるし、理解できたら、今度は図鑑に書いてある文章の意味が分かるようになる。同じように、歴史の本を読まなければ歴史は分からないが、歴史を知らないと歴史の本は読めない。哲学を知らずして哲学書を読むことはできないが、哲学書を読まずして哲学を知ることはできない。

書くことは難しい、とよく言われる。しかし、それは上手な文章を書くのが難しいのである。誰だって日記を書くことはできるだろう。日曜日、山に行ったことを日記に書けば、それは立派な紀行文である。いくら筆まめな人でも、何の経験もなく書くことはできない。反面、筆無精な人でも、おもしろい経験をしたなら、とにかくペンとノートがあ

れば何か書けるはずである。表紙で取り上げた『私の綴方』の引用文の最後に「立派な文は人を深く感じさせる力があります。人を感じさせることが強ければ強いほど、それは立派な文であります。」とある。人を感じさせる文とは必ずしも文学作品だけではない。人を深く感じさせる文章とは、人を深く感じさせる経験をした人から生まれるのではないか。NHKの成人の日の番組「青年の主張・全国コンクール」で高い評価を受けるのは「最も上手な作文」を書いた人ではなく、最も人を深く感じさせる経験をした人なのではないか。

「鹿沼の自然・栃木の旅」は、そもそも北光クラブの主催するチャレンジスクール（放課後子ども教室）の一つとして提出した自然観察会の案内と報告を、自然観察クラブとしてもきちんと残したいという思いから発行を開始した。この際と懇意にさせていただいている方や観察会の参加者に原稿を書いていたいただき、また編集人が予想以上に熱を入れてくれていることもあって、レベルの高い会報になっていると思う。主要な執筆者の山口氏が帰郷されたことは残念だが、佐々木伸二君の報告文は号を重ねるごとに上達してきていて目を見張るものである。

僕を書く文章は会報の頁数を4の倍数にするために書いているものなのでほとんど反響はない。

ただ、田部重治の『山と溪谷』を表紙の本に使ったことからご連絡をいただいた田部重治研究会の白坂正治氏に小誌のバックナンバーを差し上げた時、次のようなおたよりをいただいている。



過日は電話にて失礼致しました。『鹿沼の自然・栃木の旅』第1号～14号を御恵送賜わり、真にありがとうございました。どの号も読んで楽しみ、見て楽しみ、すばらしいと思いました。ウナギの御話は日々のささくれがクリーニングされるような感じがします。植物学といえば、田部先生と同時代の岳人として武田久吉氏のことが頭に浮かびますが、各号の書影はよろしいですね。本好きにはたまたま、活動報告も参加された方々の胸の鼓動が伝わってくるようです。

ところで私たちがすばらしい経験をするのは、実際に掛、歩き、登り、活動した時だけではない。私たちは本を読んで楽しみ、喜び、感動することができる。それ

は本を読むことによって著者と同じ立場に立ち、著者と同じ場所で同じ経験をしているような気持ちになれるからである。山に登り、探険し、他にもさまざまな経験の中に、その著書が書かれた時代によっては我々の生まれていない時代の経験の中に、私たちはその経験をした人の著書を読むことによって、出掛けずに入ってゆくことができるのである。しかも、一冊の本を読むたびにである。あるいは休みの日の一日、読書でもしていた方が、実際に出掛けるよりも有意義な一日になることさえあるかもしれない。

僕は本を大切に扱う。昭和初期に発行されながら、その時に誰かが買ってそのまま書架に収め、80年間そのままになっていたのではないか、と思われるきれいな本が、まれに手に入る。箱付の本だと昔の本は箱も手の込んだ作り方がしてあり、たいていきつい。その箱の上下を左右に手でつかんで上下に軽く振り、ひぎの上にやさしく落とす。そんなふう大切に扱うのは、お金さえ出せばいつでも手に入れることができるものではない、という貴重さもさることながら、僕は、本はその著者の人生そのものだ、と思っているからだ。

私たちはさまざまな人が書いた本を読もう。そしてさまざまな人が得た経験に、私たちもあずかろう。

そして出掛けよう。本を読んで得た知識を、さらに深め、進化させるために。そして登り、歩いてみると、昨日読んだ文章に書かれていた風景が、今はまったく変わっているかもしれない。また自然も、樹木や草花、野鳥や昆虫も昔とは変わっているかもしれない。分野や程度に差はあるものの、昔の人が記録してくれたように、私たちも見つめたもの、発見したもの、新たに見出した論理、そういうことを記録する。義務はないけれど、それも楽しみである。

今日一日歩いたコースをもう一度頭の中でたどり、見たもの、経験したことをおさらいし、疑問に思ったことを調べ、追求し、考えて書く。書くことが新たな発見につながる、そういうこともあると思う。

(阿部良司)



☞ 本号の内容 ☜

表紙の本	綿貴数夫『学習と創作・私の綴方』・・・・・・・・・・・・・・・・	2
活動報告	わたらせ渓谷鐵道・秋の小さな旅～旧足尾線のあとを訪ねて～・・・・・・・・	6
自然観察クラブ・ホットニュース	・・・・・・・・・・・・・・・・	10
次回案内	落ち葉の安蘇山塊ハイキング～大鳥屋山と岳の山、唐沢山城跡を訪ねて～・・	11
会長寄稿	読み・書き・歩く～自然観察クラブのモットー～・・・・・・・・	12

会報の購読について

会報はインターネットでご覧になれます。

また印刷したものはクリーニングハウスあべ店頭においてあります。(無料)
確実な入手をご希望の方は、年会費(1,200円)をお納めいただければ、
ご自宅まで郵送いたします。



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第19号

2013年12月1日発行

北光・自然観察クラブ

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

年会費 1200円

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

